Column
社会調査
の
あれこれ

社会調査における歴史的文脈のレリヴァンス

山田富秋
松山大学人文学部 教授

これまで私が関わってきた社会調査を振り返ると，ちょうど今から約四半世紀前の2000年において大きな変化があったことがわかる。私はそれまで精神医療分野を中心とした調査を継続的に行っていた。当時の全家連（全国精神障害者家族会連合会）付属研究所の研究員として，大規模な量的調査にも関与したが，フィールドワークとインタビューを中心とした質的調査が中心であった。1999年から2001年まで実施した精神障害者支援団体である長野市のさくら会の調査も質的調査である。調査結果の一部を収録した拙著（2004年『老いと障害の質的社会学』世界思想社）を見ると，その時の主要な方法はホルスタインとグブリアムのアクティヴ・インタビュー法（2004年，山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティヴ・インタビュー ── 相互行為としての社会調査』せりか書房）と桜井厚の対話的構築主義（桜井厚，2002年『インタビューの社会学── ライフストーリーの聞き方』せりか書房）であった。

インタビューの理解において私が重視したのは，ほとんど自明視されているがゆえに，インタビューの背後で暗黙に働いている重層的で多元的な文脈である。桜井厚はその一部をドミナント・ストーリー，モデル・ストーリー，そして「調査者の構え」として概念化したが，この背景的文脈を明示化して取り出すことは，ドミナント・ストーリーの書き換えを治療に取り入れたホワイトとエプストンのナラティヴ・セラピー（1992年，小森康永訳『物語としての家族』金剛出版）が示すように，一筋縄ではいかない作業である。なぜなら，ドミナント・ストーリーとはフーコーが「主体化／従属化の権力」，つまりアイデンティティーそのものとして理論化した，当該社会の権力作用が交差する場そのものだからである。

ところが，アクティヴ・インタビュー法は当時の社会構築主義の流行とともに，瞬く間に多くの質的調査を志す研究者たちに受け入れられるようになった。それに伴って，背景的文脈が軽視され，調査者と語り手との共同制作物であるインタビューの語りそのものが相互行為を通して瞬時に「構築」される，いわば本物の語りとは一線を画した括弧付きの人工物であるかのような誤解が広まることになった。

私が精神医療の分野から離れて，薬害HIV感染被害問題とハンセン病問題の調査をスタートしたのは，ちょうど上記のような議論が展開され始めた2001年の頃であった。構築主義的な一面的なインタビュー理解に抗して，桜井厚は相互行為が展開する場である「ストーリー領域」と，一定の自律性を持った「物語世界」とを区別して，「過去のリアルさをもって成立している」（桜井厚，2005年，『境界文化のライフストーリー』せりか書房，46頁）物語世界に目を向ける必要性を説いた。物語世界とは，その場の相互行為を通して構築可能なものではなく，むしろ，病いの経験のような，語り手自身の身体的苦痛や日記などの存在によって限定された動かしがたい世界であり，歴史学の証拠に相当するものでもある。そして，薬害被害者もハンセン病回復者も過去の病いの経験を共通に有していたのである。

インタビューの理解における背景的文脈の中でも，とりわけ歴史的文脈の重要性に気づいたことは，私にとって大きな転回点となった。語り手の「物語世界」において歴史的文脈がどのようなレリヴァンス（関連性・意味連関）を持っているのか，それを解読する作業が必須である。例えば，薬害エイズ事件の語りが，1980年代後半のエイズパニックの後になると，HIV/AIDS表象が強いスティグマを帯びることになり，意味が大きく変化する。同様に，ハンセン病問題においても，主に1930年代の「救らい」の語りと国家賠償訴訟後の「被害者」の語りとでは意味が大きく異なる。歴史的文脈のレリヴァンスこそ，社会調査に重要なキーワードのひとつではないだろうか。

Column
社会調査
の
あれこれ

映像で追う「子ども」

フィールドワークと映像実践

南出和余
神戸女学院大学 准教授

『教育第一世代』
（Youtube）

子どもを社会科学的に研究する視点と方法は多岐にわたる。そもそも「子ども」とは誰か，という議論から始まり，生物学的に著しい成長段階にあるヒト，それを文化社会的にカテゴリー化した存在としての「子ども」，それらの特質や多様性と柔軟性，さらには子どもを対象として展開される（社会化を含む）広義の教育――。こうした関心のなかで子どもを対象に研究する際，他の対象と決定的に異なるのは，いずれの研究者も自らがかつて子どもであったということ，しかしまた，いずれの研究も今を生きる子ども自身によっては展開され得ないということであろう。

筆者は，From the native's point of view（当事者の視点）を重んじてきた文化人類学において，子どもの視点をどのように捉えうるかに試行錯誤してきた。バングラデシュをフィールドとして研究するなかで，大学院生としてフィールドワークを始めた当初，生物学的には大人であっても現地の言葉や社会規範の習得などの点で当該社会の文化社会的には未熟である立場から，子ども社会の擬似成員となり，フィールドでの毎日の生活を子どもたちと共に過ごした。若干背伸びして10歳からスタートし，小学4年生の子どもたちと一緒に学校にも通った。その後，現在に至るまで約20年間，彼ら彼女らの仲間として当該社会での人生に付き合っている。

しかし，子どもたちに寄り添ってフィールドワークするということと，その経験を解釈し記述するというプロセスは，一連ではあるが同じではない。とくに民族誌研究においては，研究者自らの視点や，対象とのどのような関係の下で調査がなされたのかが解釈記述に色濃く影響するため，視点や関係に自覚的にならなければならない。さらには，記録したものを当事者に提示し，当事者と研究者との間での相互理解によって構築される解釈が求められる。この営みを子どもたちとの間でどのように展開するかが筆者の課題であった。

そこで筆者が用いたのが映像である。フィールドワークにビデオカメラを持参し，時折子どもたちにカメラを向ける。筆者と子どもたちの間でカメラは非日常の存在として受け入れられ，「筆者が子どもたちを撮影して皆で観る」という遊びの道具となった。そこに収められた映像は子どもたちが意識した非日常の記録であった。筆者はこれを長期的に反復撮影してきた。時折，過去の映像を子どもたちと観て，またその時にも撮影する。これを12年間繰り返して編集した映像作品が『教育第一世代』である。12年間の記録には，小学4年生の子どもが「子ども」ではなくなっていく様子を見てとることができる。当然ながら筆者の子どもたちとの関わり方も撮影スタイルも変わり，遊び道具として子どもたちの非日常を捉えていた映像は，筆者とカメラの前で自らの現状や思いを語るインタビュー映像へと変化する。反復的に過去の映像を観ることによって，筆者と子どもたちの間の「思い出」の相互解釈も構築されていく。筆者はこれを民族誌映画として，論文や書物と並行して公開している。

デジタル化によって映像が誰にでも操作可能なメディアとなって久しいが，社会科学研究においては未だ記録媒体にとどまっていることが多い。記録，解釈，そして公開のツールとしての映像の活用を促進していくことが求められる。

文献

南出和余，2021，「映像人類学による子ども研究――バングラデシュ農村出身の子どもたちを記録した民族誌映画『教育第一世代』の試みを通して」『子ども社会研究』27: 53-71.

南出和余，2014，『「子ども域」の人類学――バングラデシュ農村社会の子どもたち』昭和堂。

南出和余，秋谷直矩，2013，『フィールドワークと映像実践――研究のためのビデオ撮影入門』ハーベスト社。